

1 8 2

こんにちは。塾長の大井です。

先日の春講月例テストでのことです。

小4が普段のがんばりを答案に出し、高いレベルでの白熱した得点争いになりました。その結果発表で子どもたちは固唾をのんで、自分の順位・得点の発表を待ちます。

そして1位に算国同点で2人が並ぶ結果となりました。

前回トップだった男の子は、今回も1位タイでしたが、「前は単独で1位だったから。」と悔しそうに漏らしました。

1位になった女の子は本当にうれしそうでした。

前回に続いて国語で1位を取った男の子も、「うおっしゃあああ！」と雄叫びを上げていました。

その様子を見て、（このクラスは伸びる。）と確信に近い想いを抱きました。

あらゆる勝負の例に漏れず、結果にこだわられるということは、非常

に大きな資質です。

絶対に勝ちたい、負けたくない。

その思いが子どもが本来持っている成長への欲求を加速させます。

しかもこのクラスは、自分と同等かそれ以上のライバルに恵まれているので、健全な競争原理が生まれています。

しかし、私が確信したのにはさらに大きな理由がありました。

それは、彼らの悔しがったり喜んだりする姿に、どうしてもなく普段のがんばりが透けて見えたことです。

ただ結果が良くて嬉しい(あるいは悪くて悔しい)という以上に、それだけのことをやってきたという積み重ねが、感情の起爆剤になっているように感じたのです。

中学受験なんてたかだか資格試験だ。

そう言う人もいるかもしれませんが。それでも、そこに傾けた思いや注いだ切実さは、合否以上の大きな何かを子どもたちの中に刻み込んでくれます。少なくとも私たちには、「たかだか」とは思えないし、これからも思わないでしょう。

季節は巡り、年度は変わります。

それでもその本気のおもしろさは、一切変わることがありません。

2018年4月9日

大井雄之